

『ローマ熱』が描く四世代の女性像

木戸美幸

はじめに

1934年11月*Liberty*誌に“*Roman Fever*”（『ローマ熱』）を掲載したとき、Edith Whartonは72歳を過ぎていた。この短編小説は、後に他の六編の短編と併せて*The World Over*の表題をつけ、1936年4月に出版されている。翌年8月にウォートンは75歳の生涯を終えているが、最晩年に書かれた作品の中でも『ローマ熱』は、登場人物の心理と舞台背景が絶妙に重なりあう描写と、主たる登場人物二人の緊張感あふれる簡潔な会話とが際立っており、ウォートンの短編小説の中でも高い評価を受けてきた作品である¹⁾。とりわけ劇的な最後の一文は、読後に強い余韻を残し、人生の最終章にあっても、小説家としてのウォートンの力量が決して衰えてはいなかったことを、雄弁に示している。

作品の舞台は1920年代、ローマ市内を一望する丘に建つレストランに設定されており、昼食を終えたばかりの二人の中年アメリカ人女性Mrs. Delphin Slade（デルフィン・スレード夫人）とMrs. Horace Ansley（ホーラス・アンズリー夫人）が交わす会話を中心に、話は進められていく。昼食後から日没までの短い時間帯で完結する、この短編小説に登場するのは、スレード夫人とアンズリー夫人の他、スレード夫人の娘Jenny（ジェニー）とアンズリー夫人の娘Barbara（バーバラ）だけであり、しかも若い二人は、作品冒頭で母親たちを残してデートに出かけてしまう。ただ、娘たち、とりわけバーバラは、作品最後まで重要な意味をもつ存在である。

また、結婚適齢期を迎えた娘をもつ母親として、スレード夫人とアンズリー夫人は、自らが若かったころの母親世代の対応と、さらに、その母親が若かつ

たころの祖母世代の対応とを比較しながら思い出を語るのも、間接的とはいえ、この短い小説に、都合四世代、約一世紀にわたる女性の生き方が描かれることになる。旧来の友人であるスレード夫人とアンズリー夫人の会話の焦点が、25年前に二人が若かったときの、一人の男性との関わりに絞られた時点で、作品はクライマックスへと向かう。つまり、題名から推測されるように、舞台はヨーロッパ古代文明発祥の地としながら、作品が描くのは、男性を中軸として決定されるアメリカ女性の生き方である。

性格や生き方が一見対照的な二人の女性が、一人の男性をめぐる心理的に対立する作品設定は、ウォートンが*Ethan Frome* (1911年)、*The Reef* (1912年)、*The Age of Innocence* (1920年)などでくりかえし用いた手法である。また、過去に一人の男性をめぐる駆け引きを演じ、その後の人生で、結婚市場の勝ち組に属すると自他ともに認める女性が、負け組に甘んじて生きてきた女性に、かつて心を奪われた男性との婚外子（しかも、その子は美しく魅力的な妙齢の女性に成長していて、勝ち組の女性の羨望と嫉妬を駆りたてる存在となる）がいると知る、『ローマ熱』のパターンは、実は1924年に出版した*The Old Maid: The 'Fifties* (『二人の母—1850年代』)とまったく同じものである²⁾。この二つの作品の舞台設定には、半世紀以上の開きがあり、短編小説と中編小説という、ジャンルの違いがあり、さらに作品の執筆時期にも、十数年の開きがあるにもかかわらず、これほど類似した作品を、再度世に問うたウォートンの意図はどこにあったのであろうか。また、『ローマ熱』を執筆したとき、自らの生涯がもうそれほど長く残されてはいない、とウォートンが意識していたか否かは別としても、70歳を越えて、今一度、女性の生き方をテーマとして作品を書いたことに、万感胸に迫るものがあつたのは確かであろう。ちなみに対照的な二人の女性を描くパターンの作品としては、『ローマ熱』がウォートン最後の一作である。

女性の人生が、結婚という制度のもとで「妻」となり、「母親」となって初めて完結すると決めつけられていた時代背景を理解しなければ、結婚市場での勝ち組、負け組をめぐる女主人公たちの争いや、婚外子を産み育てた複雑な心

理について、くりかえし作品で描いたウォートンの意図を理解することは不可能である。この拙論では、マリリン・ヤーロム著*A History of the Wife* (『妻の歴史』)を参照して、アメリカ社会における「妻」の意味や立場が、歴史的にどのように変遷してきたかをみながら、『ローマ熱』の描く四世代にわたる女性の生き方に触れ、さらに、主人公である二人の女性の葛藤について読み解いてみたい。

I

『ローマ熱』は、デルフィン・スレードをめぐるAlida (アリーダ、後のスレード夫人)とGrace (グレース、後のアンズリー夫人)の競い合いを、主にスレード夫人の視点から描く。作品はまず、パラティヌスの丘に建つレストランから古代ローマの公共広場を見下ろしている、アリーダとグレースの穏やかな描写で始まる。幼なじみの二人は、世紀の変わり目のOld New Yorkで娘時代を過ごし、新婚時代も斜め向かいという至近距離に住み、互いに行き来しつつ結婚生活を送った後、ほぼ同じ時期に夫を亡くしており、久しぶりにローマのホテルで偶然に再会して、同年代の娘をもつ母親として話題も共通であることから、作品冒頭の導入部が設定されている。だが、二人が過去の恋愛について語りはじめると、旧知の間柄は、一転してとげとげしいものとなり、双方が四半世紀間胸に秘めてきた激情を吐露しながら、過去の真実を告白する展開へと、一気に筆が運ばれていく。

アリーダとグレースのこれまでの生活を語る、いわば二人の半世紀の簡潔な描写は、アリーダの視点で書かれているのだが、娘時代の男性との関わりを軸に、「妻」となり、「母親」となったことだけに集約されている点が注目される。この書き方によって、女性の生き方が限定されていたことがうきぼりにされる一方で、同時に、二人の会話で回顧されるのは、祖母、母親、本人、娘の四世代にわたる「結婚前の男女関係」の変化でもある。その変化が、ローマの夕暮れ時に、湿気の多い場所で過ごして罹るマラリア型の発熱、俗称「ローマ熱」

と絡めて、象徴的に語られている部分を引用してみる。

『私、ちょうど考えていたの、』と彼女（スレード夫人）はゆっくり言った。『ローマはそれぞれの世代の旅行客に、とても違ったものを意味しているって。祖母たちには、ローマ熱があったでしょ、母たちには、感傷的で危険だったのよ—私たち、しっかりつき添われていたものだよ！—娘たちには、本通りの真中ほどの危険もないのよ。あの子たちにはわからないでしょうね—でも、あの子たちが失ったものもすごく大きいわ！』³⁾

スレード夫人のこの発言は、若い娘に対する母親の対応が、時代ごとに変化したことを端的に示している。そして母親の対応の変化は、若い女性のあり方そのものの変化にほかならない。

祖母世代が母親だった時代には、死に至る「ローマ熱」の罹患の可能性が、結果として若い娘（＝スレード夫人の母親世代）を別の危険、すなわち、親の目の行き届かない恋愛沙汰からも遠ざける役割を果たしていた。「ローマ熱が街にはびこっていたときは、娘を危険な時間帯に家に留めておくことが、比較的容易だったにちがいない。」（傍点筆者。16）若い男女が命まで賭け、暗闇に乗じて逢瀬を楽しむ可能性は、さほど高くはなかったであろう。「ローマ熱」を象徴的に考えれば、若い男女の逢瀬には、もっと熱い関係、つまり性的関係が伴っていたこともうかがわせるような描写ではあるが、ヴィクトリア朝時代（1837～1901）の従順な「家庭の天使」となるように育てられた女性が、性の逸脱行為に陥った可能性はどれほどあったのだろうか。

世代交代後、その母親が自分の娘（＝アリーダとグレースの世代）を監督する立場になったとき、親が自分に対応したのと同様に娘に対応することは不可能になっていた。社会における女性のあり方に変化がおきていたからである。ウォートンの表現を借りれば、時は「上品であること（respectability）が軽んじられた時代」（12）に移りかわっていた。respectabilityとは、「世間体」や「しきたり」とも訳すことのできる単語であり、ヴィクトリア朝時代の女性がなにより尊重した価値観であった。したがって、この簡潔な表現は、人々、

とりわけ女性の生き方が、この時代に大きく転換したことを示しているといえよう。ウォートンがここで用いたrespectability was at a discountという表現も、女性の性がまるで商品のごとく扱われているような言い方で、「上品」だった女性が奔放な行動をとるようになった時代の変遷を象徴しているようにも思われる。

『ローマ熱』の舞台は1920年代であり、主人公のアリーダとグレースは25年前を回想しているので、この二人が若き娘時代を過ごしたのは、年代的には世紀の変わり目、つまり、ヴィクトリア朝時代の末期とぴったり重なっている。半世紀以上にわたってこの時代の女性にもっとも求められてきた「上品であること」が、すでに死守すべき徳目からはずれつつあることは、スレード夫人自身の「親の言うことを少し聞かなくなっていたので……母親は私たちを家に留めておくのが難しいとわかったのよね」(16)という言にも明らかだ。おそらく、母親世代とはちがって、アリーダも、グレースも、従順な娘の殻をうちやぶり、「感傷的で、危険な」恋を楽しむことが可能だったのだ。この時代には、受け身で親が決めた結婚に従うのではなく、時にスキャンダルにもなる熱情的な恋愛を経験する女性も存在したかもしれない。もちろん、それでも母親が娘につき添って出かけた時代であったので、結婚前の親密すぎる関係が、ある程度抑止されたであろうことは想像にかたくない。だが実のところ、この「つき添い」の存在そのものが、ヴィクトリア朝時代に理想とされた、「上品で」、感情を抑制した、冷たい人形のような女性の姿が、必ずしも生来のものではないことの証左ではないだろうか。

さらに時代は進み、1920年代の今、結婚適齢期を迎えた娘の母親であるスレード夫人は、自由な恋愛関係を享受するバーバラとジェニーを前にして、かつてのような慎みある男女関係には存在したロマンスが消失したことに、嘆息をもらしている。だが、彼女の嘆きが建前にすぎないのは、おとなしすぎて精彩を欠くジェニーに困惑し、「彼女はジェニーが一ふさわしくない男性に恋することすら望んでいた」(14) 過激な本音に明らかである。1920年代といえば、第一次世界大戦を経験したアメリカ社会では、既存のあらゆる価値観が大きく

揺らぎ、人々の生き方も劇的に変化した時代である。アンズリー夫人も、「新しい社会になって、私たちたしかにたくさんの時間をもてあましているわ。」(10)と、日常生活での変化を実感する一方、娘に関しては、「私は、自分がある子たちの実態をまったくわかっていないって結論に達したの、」(11)と認めている。自分がついていけないほどの劇的変化が、我が子を含む若い男女関係に起こっている実状と、それを母親世代が認識している現実を示す一文である。

スレード夫人にとっても、アンズリー夫人にとっても「たいせつな娘の控えめなつき添い」(傍点筆者。13)役すら、明らかに形骸化している。「私たちの娘には、感傷や月の光なんておはらい箱同然よね。」(16)というスレード夫人のことは、とりわけ恋愛関係が現実的なものとなった結果、未婚の男女でも、自由な性的関係で結ばれる可能性を、母親世代が黙認していることすらうかがわせる。したがってバーバラとジェニーが、つき添いであるはずの母親をおいて出かけてしまっても、「いつ娘たちが戻ってくるやら、わかったものじゃないわ。あなた、どこから戻ってくるのかをご存知？ 私は知らないわよ！」(11)とスレード夫人は諦観して言うしかない。若い娘が自由な意志で、主体的に行動するようになった結果、母親のつき添い役はもはや過去の遺物である。

II

以上のように、確かに世代ごとに、若い娘の異性関係のもち方は変化してきた。だが、その関係の最終目的が「結婚」であるとの前提に揺るぎはない。祖母世代はむろんのこと、母親世代と比べても格段の自由が許されている点において、バーバラとジェニーのデートのし方が大きく変化したとはいえ、「ローマで最高の結婚相手」(16)であるイタリア人侯爵に注目しているスレード夫人の価値観が示しているのは、結婚によって女性の経済的・社会的後半生が決定されるという現実であり、バーバラの「引き立て役」(16)にすぎない「ジ

エニーには、バーバラといっしょにいたらチャンスがない」(16)、と母親としてスレード夫人が焦燥感を露わにするのは、一度の結婚が女性にとって負けの許されない最終目的であると考えるからだ。つまり、スレード夫人は、25年前、グレース相手にデルフィン・スレードを競い合ったのと同じ闘いに、今度は娘の目線で挑んでいるにすぎない。「だからグレース・アンズリーは、あの二人の娘がどこへでもいっしょに行くのを好むのかしら？」(16)と猜疑の目でかつての友人を見るスレード夫人の描写に明らかなのは、女性同士の友人関係が、「結婚」をキーワードで見れば、ライバル関係にすぎないことであり、25年前の旧友との闘いは、世代を越えて継承されていることである。

さらに、スレード夫人とアンズリー夫人の会話の形で明らかにされる、祖母が若かった頃についての男女関係にも触れなければならない。一世代が四半世紀で次世代を産むと仮定して、75年前、つまり、19世紀中頃と推測される、祖母世代が娘であったときの衝撃的な事件は、それがヴィクトリア朝初期とほぼ重なるだけに、四世代に及ぶ女性のあり方を辿る貴重なエピソードとして注目に値する。グレースの祖母の姉妹が「同じ男性を恋したために」(18)、姉が口実をつくって日没後の公共広場に妹を出かけさせ、ローマ熱に罹った妹が死んだ、という家伝は、一人の男性を獲得する(=夫とする)ために、姉が犯した確信犯的罪の凄まじさを伝える。望む男性と結婚するためには、妹の命まで犠牲にすることを厭わないほど、ヴィクトリア朝の「上品な」女性は追いつめられていたといえよう。一度限りの結婚によって、その後の人生が左右されたため、たとえ妹の命を奪ってでも、意中の男性を手にしたという、激しい感情を抑えることができなかつたのだ。女性にとって「結婚」とは、かくも重き意味をもっていたのである。

この家伝が伝える表向きの成り行きは、グレースの母親世代にとって、娘たちの自由すぎる恋愛行動を抑止するための方便として、利用価値が高かった。これを伝え聞いた若きアリーダは、デルフィンと婚約したばかりで「あまりに幸せだったから」(19)、この話に怯えたという逸話を披露している。だが、作品のクライマックスで、アリーダとグレースも、デルフィンをめぐる同様の

争いを演じたことが、25年ぶりに白日の下にさらされるので、実際には女性にとって、結婚市場での勝ち組となるための闘いが、連綿とくりかえされてきたばかりでなく、その闘いは、「上品」どころか、性的関係も辞さない過激なものであったことも明らかにされる。アリーダが怯えたものも、「ローマ熱」罹患ではなく、グレースの捨て身の挑戦だったのではないか。

さらに注目すべきは、それほどの死闘を演じて獲得した妻の座が、どれほど価値あるものであったか、という問いである。ウォートンはスレード夫人としての日々を思いかえすアリーダの簡潔な描写に、その答えを用意している。

アリーダの視点で語られるスレード夫人としての過去は、アンズリー夫妻の生活と比較して成り立っている点が、まず注目される。そして、過去の記憶は、当然のことながら、二人が選んだ夫の比較で始まる。ホーラス・アンズリーは妻グレース同様、「外見が整っていて、非のうちどころがなく、模範的」(12)な「オールド・ニューヨークの博物館の標本」(12)と表現されるのに対し、デルフィン・スレードは世界の顧客を相手に活躍する法人弁護士として設定されている。上流社会の人間と、新興の金持ちの拮抗も、ヴィクトリア朝時代終焉の特徴として、ウォートンが頻繁に作品でとりあげるパターンである。アリーダは、伝統に縛られた『お国の慣習』のラルフ・マーヴェルを思わせるホーラスではなく、積極的に新時代の潮流によって活躍するデルフィンの価値観を共有する人物だ。アンズリー家の「すべての出入り、買物、旅行、記念日、病気」(12)を詮索するスレード夫人の好奇心は、夫が株で大儲けをしてパーク街に居を移すまで続いたというから、他者に優越感を覚える手段として、金銭的成功が重要な意味をもつのは明白である。しかも経済的に、社会的に、アンズリー家に負けまいと、文字通り見栄をはるスレード夫人の記述は滑稽ですらある。その後の「有名な法人弁護士の妻」(13)としての生活に関する記述も、「名士」の妻として「上等な衣服」を身につけ、「著名な」同僚とのつきあいや、「優雅な」もてなしのやりとりを楽しむ日々を回想するものであり、物質尊重の価値観が基底をなしている。これに対し、アンズリー夫妻の生活の詳細が作品中に描かれることはないし、ホーラスに関する描写もない。ただ、スレード

夫人が羨むほどの、情熱的で印象的な娘バーバラが、この「つまらない二人」(12) から生まれてきたことを不思議に思う場面は、ホーラスがスレード夫人の選んだデルフィンとは、およそ対照的な人物であることを推測させるに十分である。

ところで、アリーダが侮っているように、実際にアンズリー夫妻が「つまらない二人」であるならば、彼女はなぜ、これほどの競争心をグレースに対して抱いたのであろうか。ウォートンの描く二人の対立する女性たちの例にもれず、勝ち組を自認するアリーダの、負け組グレースに対する異常なまでの関心は、つまるところ、アリーダの敗北感の裏返しではないか。しかも、夫亡き後も、一人の独立した存在ではなく、スレード夫人であり続けるアリーダにとって、「デルフィン・スレードの妻であることと、彼の未亡人であることには、大きな落差があった」(13) し、「あのような夫に従って生きること、彼女の全能力が使われ、今や彼女には、生きる楽しみが娘だけになってしまった」(13) という。「妻」として夫に従い、夫亡き後は、子に従う「三従」の婦道そのものが、女性の人生を形成する悲劇を、ウォートンは容赦なく描写する。いまだにアリーダ自身が、「スレード夫人であること」を自己存在の拠り所としているために、アンズリー夫人との終わりなき競争心が存え、心の平安を得られない原因ともなっているのではないか。

ではなぜ、女性はこれほど「妻」の立場に固執し続けてきたのだろうか。また、「妻」とは、アメリカ社会においてどのような意味をもってきたのだろうか。『ローマ熱』でウォートンが描く1920年代までの一世紀において、「結婚すること＝妻となること」の重みは不変であったことが、アリーダとグレースを中心とした四世代にわたるエピソードで明らかとなったが、それはアメリカ社会での実像を反映した姿なのであろうか。

III

ヤーロムによれば、初期アメリカ社会の特徴のひとつとして、ヨーロッパか

らの移民について、16世紀と17世紀を通して北部植民地でも南部植民地でも、男性の数が女性の数より多かったことが挙げられる（ヤーロム141）。これは、大西洋を渡る危険な船の長旅や、自然の厳しい植民地での、無からの生活を考えれば不思議ではない。このように男女の数が不均衡であった上、開拓前線の日常において、女性が家族や共同体の存続に不可欠の存在であったことを想像するのも難しくはない。結果として、地域や、社会階級や、持参できる財産の規模にかかわらず、結婚を望む女性は、だれでも夫を見つけることが可能であり、実際に、植民地時代のアメリカでは、成人白人女性のほぼ全員が既婚者であったという（ヤーロム146）。つまり、当時アメリカ社会に住むことは、成人白人女性であれば、「妻」となることを意味したわけである。また、英国系白人女性の不足が、入植者の男性と先住民や黒人女性との異人種間結婚によって埋めあわされることはなかった。とりわけ、奴隷制度が進化し、白人以外の人間から人間性が奪われていくにつれ、先住民や黒人との性的関係と結婚に対するタブーが根付いたからである。17世紀中旬以降には、植民地各地で、異人種間通婚禁止法案が承認されていった（ヤーロム144）という。先住民や黒人の競争相手のいない17世紀の白人女性の絶対数不足は、また、結果的に、結婚における「相思相愛」の価値を高めていった。つまり、宗教、家族、社会の力によって支えられていた中世ヨーロッパの結婚制度（ヤーロム93）に対して、愛情、個人の選択を重視する近現代的結婚の土壌を築いたのは、この時期のプロテスタントだったといえるわけである（ヤーロム145）。

さて、アメリカでは18世紀を通して、結婚後の女性は、イングランドのコモンローに倣い、*feme covert*（法律上の既婚女性）として扱われた（ヤーロム147）。*covert*とは「隠された」「覆われた」「密かな」という意味をもつが、「隠された女性」とは、つまるところ、女性から法的権限をすべて奪い、その公的存在が夫によって一元化されることを意味するものであった⁴⁾。このような「妻」の法的な位置づけは、女性を夫に庇護される受け身の存在にし、夫との関係が悪化しても、事実上、離婚を困難なものにした。また、女性を男性の下位におく聖書の発想は、啓蒙思想の発達した18世紀になっても不変であった。

ジャン・ジャック・ルソーが『エミール』（1762年）において、弱く受け身であるべき女性に、不公平を甘受することを求めた影響は、大西洋を越えたアメリカでも強かった（ヤーロム147）。つまり、思想面においても、「妻」は夫よりも弱く、必然的に夫に依存する存在と見なされたのである。女性は、夫の命令に従う家庭的存在であり、公的生活からは排除される者、という性差別的思想（ヤーロム164）はこのようにして広まっていった。

「妻」の社会的定義は、「夫の性と感情面でのパートナー」「母親」「主婦」の三つの基本的役割によって構成されていた（ヤーロム146）。その女性に唯一与えられた活躍の場が「家庭」である。だがヤーロムは、妻の不義を糾弾する夫の告発を含めた、新聞記載のさまざまな家庭内問題を資料として挙げることで、「家庭」を理想的に守ったとして、18世紀のアメリカ人妻を美化することの誤りを指摘する（ヤーロム150）。歴史的には、アメリカ独立戦争時代に、多くの妻が戦争に参加した夫の代理を務めることを余儀なくされたし、独立に先だって起きた歴史的できごとに対しても、妻たちが不買運動に参加したり、軍隊を支援したりして、「家庭」外での活躍の場を広げていった事実に触れている（ヤーロム158）。「弱き器」、「ひ弱な」性で、理性では男性に劣り、夫に仕え子どもを育てるために創造された（ヤーロム147）女性の、実は男性に劣らぬ力や能力を、時代が囮らずも証明することとなったのである。家父長制はなお優勢ではあったが、恋愛感情に基づいて結婚相手を選択する権利が個人にあるとし、配偶者が、主に愛情、友情、共通の価値観や関心によって結ばれる（ヤーロム156-57）新しい結婚像が、18世紀に現われはじめていた。また、新しい国のために市民を育成し、市民教育の責任を果たすことを求められた点においても、家庭内の責任は政治的な意味合いを帯びることになった（ヤーロム172）。ただし、独立革命時、必要に迫られて家庭外での活躍を経験した女性にとって、アメリカ国民として、たとえ次世代の教育を概念化したとしても、つまるところ、母親業は家庭内の専門職であったことをヤーロムは指摘する（ヤーロム173-74）。その意味において、女性の位置はまた家庭へ、と逆行したといえよう。

ヤーロムによれば、近現代の欧米における結婚は、アメリカ独立革命から1830年くらいの間に出現したとの見方で、社会史学者の大半は一致している（ヤーロム175）という。この50年間に、配偶者選びにおいて、もっとも重視される基準は、財産、家族、社会的地位から、愛情へと替わった（ヤーロム175-76）からである。男女が愛情に基づいて将来のパートナーを決めるために、結婚に先だって、恋愛が公認されるようになったのは自然の成り行きもといえよう。恋愛公認は、ヴィクトリア朝時代にはいつてからのことではあるが、この場合の「恋愛」とは、奔放な肉体的情熱の解禁とは解釈されておらず、いかに親密な求婚期間を過ごしても、将来夫婦となる男女は「結婚するまで性的関係をもたない」（ヤーロム177）といった、一定の社会的しきたりに則ることを求められたようである。また、結婚に際して、若い女性は「類似した社会的・宗教的背景、相互尊重、共通の価値観」（ヤーロム177）を考慮したともいう。さらに、ヤーロムは、愛だけでなく、金銭も、19世紀社会における結婚生活の土台であって、小説の主題ともされてきたことを、ウォートンの名も挙げて述べている（ヤーロム180）。「妻」は自ら働いたり、土地・財産を所有することを許されなかった⁵⁾。さらに、中流、上流の家庭では、夫が家族を養う責任を担い、「妻」は収入を得るものではないとされていた（ヤーロム180）。近代以前のように、妻子も働いて家計の一助となった時代ではなくなったのである。だからこそ、夫の経済力は、結婚を決定する上で大きな意味をもつようになった。

ヴィクトリア朝時代、アメリカの「妻」の法的、社会文化的地位は、1848年セネカ・フォールズでの女性の権利章典に始まる、初期女性運動の影響で変化しはじめ、「結婚=隷属」という表現は、1850年代までに、結婚における不公平な権限配分を批判していた改革派たちの共通認識となった（ヤーロム194）。西へと拡大を続けるフロンティアにおいては、女性にも、男性に負けるとも劣らぬ肉体的強靱さ、精神的強さ、自立心が必要不可欠であったし、したがって、より自由な教育が求められたことも周知の事実である。また、国を挙げて、教育の重要性は叫ばれたものの、女性の教育が主に結婚への道程のひとつと考え

られており、良妻賢母育成の観点から評価されていたことも注目しておかねばならない（ヤーロム195）。

19世紀後半には、ヨーロッパ同様、アメリカでも「新しい女性」が誕生していた（ヤーロム280）。「妻」でもなく、「母親」でもなく、主婦でもなく、なによりまず一人の個としての存在を意識する女性たちが、これに続く四半世紀の間、女性の自立と男女平等を求めていった。経済社会の発達は、新しい雇用を生みだし、「独身でいることを自ら選択する」（ヤーロム280）女性すら現われた。このように女性がかつてない経済的、社会的力をもつようになると、「新しい女性」を「男勝りの女傑」（ヤーロム281）と揶揄する声が出てくる一方で、「妻」たちの多くも、社会や家庭内での権限を求めて、闘うようになった。このような時代の過渡期には当然のことではあるが、結婚に「女性の自律と伝統的な妻の身分との緊張」（ヤーロム285）が伴うことになった。働く女性は、結婚そのものへの脅威ではなく、むしろ「結婚市場」での女性の立場を優位にする一方で、中流の女性の場合、働かないことが、夫の社会的地位を証明することになった（ヤーロム288）。だがこのような経済的依存が、「妻」の自立を阻むからくりについては、シャーロット・パーキンス・ギルマンが1898年に「女性が男性の収入に依存していることが、女性が補助的な地位におかれている主たる理由」（ヤーロム289）との、鋭い洞察に基づく指摘をしている。

ヴィクトリア朝時代の女性が「家庭の天使」と呼ばれたのは、精神的存在で、官能的、性的な欲求を持たないと信じられていたからであるが、1870年代から1880年代になって「女性問題」が議論されると、女性の性に関する新しい考え方も受け入れられるようになった。女性の貞節も「世論の圧力」（ヤーロム295）による見せかけにすぎないと考える者もいた。とはいえ、大半のアメリカ人は、婚前は純潔、結婚後は「妻」と「母親」という役割に満足する女性像を理想として堅持していた（ヤーロム309）。つまるところ「結婚しないで行うセックスは姦淫であり、結婚すればセックスは義務であり、権利となった。それが法律であった。それが結婚というものであった。」⁶¹との社会通念が崩れざるには、さらなる時間が必要だった。ヤーロムは、『妻の歴史』の最終章の「新しい妻

に向かって（1950年～2000年）」において、第二次世界大戦後の1950年の女性について、『評判が傷つくこと』、さらに悪ければ妊娠することを恐れて、『最後までいく』ことは、少なくとも婚約指輪をはめるまではなかった、と推測される。……離婚したり、夫に先立たれたりした場合でも、一生『ミセス』と呼ばれることが多く、『ミス』よりも格が上だと考えられていた。」（ヤーロム352）と描いている。第一子の四割が結婚していない親のもとに生まれている現実（ヤーロム353）に到達するまで、実に半世紀の長きを要したのである。

以上、アメリカ社会における「妻」の歴史的変遷をみてみた。16世紀に新大陸でアメリカ社会の第一歩が形成されて以来、21世紀の声を聞くまで、ほぼ一貫して、この社会に女性として生きることは、「妻」となることを意味してきた。17世紀には、そのきっかけが愛情や個人の選択に委ねられるようになり、18世紀には、その決定の前提としての恋愛期間も公認されるようになった。19世紀中期出版の*Webster's Dictionary*に、「結婚する」とは「男性と女性を生涯夫と妻として結びつけること」とあるように、結婚によって夫と妻は一つの個となり⁷⁾、妻の個は夫のそれに隠された。「妻」とは「隠された女性」として生きることを受け入れることでもあったのだ。アメリカが経験した戦争時に証明されたように、女性にも男性に劣らぬ能力・力があることが認められ、女性自身の認識が変化をみせたことも歴史的にはあった。しかし、「聖書の時代から1950年代まで、妻を養うのは夫の責務だった。その代わりに妻は、セックス、子どもたち、家事を提供することが期待された。それは両者間で暗黙のうちに了解されたというだけでなく、宗教法や民法に成文化された代償だった。」（ヤーロムxiv）

ウォートンが『ローマ熱』で描いた、ヴィクトリア朝初期から1920年代の女性の生き方も、「結婚」に向けた短距離走に焦点をあわせたものであった。確かに、結婚前の男女のあり方は、多少の変化を見せているとはいえ、「妻」となるゴールに向かう闘いそのものは、四世代間に大差がない。では、次に、アリーダとグレースがその競争をどのように闘ったのかをみてみる。

IV

スレード夫人とアンズリー夫人は、外見も性格も対照的な人物として描かれる。前者は「太めで、浅黒い顔で」(10) 目鼻立ちからも意志の強さがわかるのに対し、後者は「小柄で、青白い顔色」(9) で、作品冒頭から、「謝罪するような」「少しうしろめたそうに」「ささやく」(10) 様子が印象的である。春の昼下がり、眼下に広がるすばらしいローマの光景に目もやらず、編物に集中するアンズリー夫人には伏線が敷かれている⁸⁾。「彼女の友人と比べると、明らかに自分に自信がなく、社会での自分の権利にも自信がない」(11) アンズリー夫人が、同じ作業を忍耐強くくりかえし、意のままの作品を創造していく編物に夢中である設定は、女性らしさを強調する小道具として使われているようにも思われるが、彼女が選んだ深紅色の絹糸は、内なる激しさを象徴している。一見従順で自己主張しない女性が、実は自分の意志を貫く強さを持ち、その強さを実行に移すために、時に非情さを見せるパターンも、ウォートンがよく用いる人物像である。また、自分の動揺を隠し、対話の相手をかかわす手段としても、アンズリー夫人はうまく編物を利用している。スレード夫人との会話に向きあいたくない時、アンズリー夫人は編物に没頭するふりをするのだ。しかも「アリーダ・スレードはとても賢いわ、でも、自分で思っているほどでもない」(14) との洞察からも、アンズリー夫人は、スレード夫人が思っている以上に鋭い人物であることが明らかにされる。だが、一貫して二人の会話を主導するのは、もちろんスレード夫人である。昼食を終え、夕食用の席を確保するため、レストランのボーイ長にチップを渡す行動にすばやく移るのも、やはり彼女である。25年来心に隠してきた秘密を暴露するために、アンズリー夫人とできるだけ長い時間を過ごさなければならないのだ。

外見、言動によって、二人の女性の対照性は徐々に描きだされるが、二人の娘ジェニーとバーバラも、皮肉な対照をみせる。作品中で、若い二人自身がライバル意識をもっているように描かれることはないものの、スレード夫人は、自分たちのライバル関係を、娘世代に移乗した目でバーバラを見ている。母親

の健康を気遣うジェニーは、むしろ看護婦として適性である、と描写される。自己を犠牲にし、他者に献身的に尽くす看護婦は、ヴィクトリア朝時代に求められた「家庭の天使」像そのものである。「新しい女性」が時代を風靡しはじめていた1920年代に、ジェニーは確かに時代遅れのイメージを与え、なにより娘に良縁を望む母親をいらだたせたにちがいない。25年前のデルフィンをめぐる自分とグレースの闘いを、今度はイタリア人侯爵をめぐってジェニーとバーバラが再演し、ジェニーがグレース役をあてるにちがいない、との焦燥感をスレード夫人は抱く。魅力的で社交的なバーバラを羨望するスレード夫人が、「私は華やかな子が欲しいってずっと思っていたの……なのに、どうしてその代わりに天使を授かったのかわからないわ。」(17)と述べたのに対して、「アンズリー夫人は笑いかえして、かすかにつぶやいた。『バップスだって天使だわ。』」(17) 作品の最後で、バーバラがスレード氏の子であるという、衝撃的な出生の秘密を明かされた後で、再度このアンズリー夫人の反応を読みなおすと、婚外子である我が子を、心の糧として生きてきたグレースの矜持が光る一言である、と理解できよう。その出自を当時の価値基準から判断すれば、バーバラは、およそ「天使」とは言えまい。また、自ら「家庭の天使」の掟を破ったグレースが、四半世紀後、娘にヴィクトリア朝時代の、古き理想の女性像を望むはずもない。だが、バーバラはグレースが自分の信念に従って行動した結果、宿し、守り育ててきた「天使」なのである。ヤーロムによれば、婚前の性的関係は1950年代でも認められていなかったというから、それよりさらに半世紀前の、この設定は、かなり大胆ではないか。また、それだけに、ウォートンの思い入れも強いように思われる。『二人の母—1850年代』のシャーロットが産んだ婚外子ティーナも、バーバラも、結婚市場の勝ち組を自認する女性が、羨望のまなざしで見られる魅力的な娘として描かれる。「家庭の天使」像に抗って、負け組として生きることを敢えて選択した女性たちを、ウォートンが是認し、時にその勇気を支持し、その結果として生をうけた子（ウォートンの作品では圧倒的に女子である）に暖かなまなざしを向けていたからであろう。

「自分に自信がない」はずのアンズリー夫人が、作品の初めでスレード夫人

の人生を「失敗やまちがいがいっぱいの、悲しい人生」(14)だと断定するのは、友人の後に夫となる人物と性的関係をもった当事者ゆえである。したがって、スレード夫人本人の視点による、スレード氏の「妻」としての誇りたかき人生回顧は、滑稽にすら響く。つまるところ、「妻」の座とは、いかに脆弱な基盤の上に成り立っていることか。「このように、二人の女性は、それぞれが自分の小さな望遠鏡のまちがった先端を通して、お互いを想像していた。」(14)アリーダとグレースは、一見対照的で、互いに自己肯定感をもち、相手を理解していないと自覚している点では一致している。アリーダはむしろ、グレースに対してずっと敵対心を抱いてきた。若きアリーダがグレースにライバル心を抱いたのは、グレースの「いまだに魅力的で気品のある」(12)美しさと、「控えめな流儀、感じのよさ」(21)ゆえであった。つまり「家庭の天使」の装いに、脅威を感じとっていたからだ。アリーダの感覚が鋭かったことは、25年後の今明らかとなる。二人が、若い日の思い出がつまったローマの絶景を目の前にして、おそらくこれまで避けてきた事実と向きあう過程を描くのが、『ローマ熱』の主題である。「家庭の天使」像をひきずっていた25年前には不可能であった、正直な自分を吐露する、この作業をのりこえなければ、二人ともあるがままの自分を受けいれて生きていくことが、不可能であるからだ。

バーバラがデルフィンの子であるという事実をアリーダに告白する、グレースのためらいは、編物の手作業にそのまま反映される。「あまりに昔の思い出がつまった」(15)古代ローマの遺跡を前にして動揺したグレースは、25年前の事実に向かい迫ろうとするアリーダをかわそうと、「こっそり編物を引きよせ」「編物を目にずっと近づけた」(傍点筆者。15)。アリーダの追及を逃れる手段が編物であるのは確かだ。アリーダは、祖母、母親、自分、我が子へと続く四世代の、若い男女のあり方に言及しながら、執拗に核心に向かい迫ろうとする。すでに25年前には「母親は私たちが家に留めておくのが難しいとわかったのよね。」(16)そのとおり、現に、グレースはデルフィンと逢瀬を楽しみ、バーバラを授かったのだ。編物の細かな目を数えながら、グレースはあいまいに返事を返す。両親に似ていない「あれほど活動的な」(17)バーバラ誕生を穿鑿する、アリー

ダの辛辣な笑いに、編物を落とすほど、今やグレースの動揺は明らかである。一方、これほど執拗に相手を追いつめるアリーダも、自己嫌悪に陥り、ずっと昔からグレースに嫉妬してきた自分と正直に向きあう。だが、眼前のローマの光景は、彼女を落ちつかせるどころか、「彼女の激怒をいや増した。」(18) おりしも日没が迫り、アリーダの記憶は、昔男女が逢瀬を楽しんだ時間帯へと絞られたからだ。結局、これこそ25年間、アリーダが最も恐れ、かつ最も確かめたかったことではないだろうか。実際の時の移ろいと、過去をだぶらせつつ、会話を運ぶウォートンの手法は、緊迫感を与え、みごとである。「彼女(グレース)を嫌わないように、もうひとふんばり努力しないとイケない。」(18) と自分に言い聞かせるアリーダの苦悩も、読者の共感を呼ぶ。

だが、もはやアリーダは自分を抑えることができない。25年前、同じ男性を愛した「家庭の天使」そのもののグレースを排斥するために、自分が書いたデルフィンからの恋文でグレースを夜の円形球技場に呼び出したことを告白する。ついに会話が核心に迫った場面で、アリーダとグレースの間を揺れる振り子のように、相手の意表をつく事実が次々と暴露されるので、緊張感が一層高まる。グレースの動揺が最高潮に達しているのは、パニックで編物を落としてしまった描写で示されるものの、彼女が「思いがけない平静さで」(20) 自分の挑戦に応じる様に、アリーダは舌を巻く。25年前、一人でデルフィン・スレードに会いに出かけ、今、スレード夫人の追及に面と向きあう精神的強さは、グレースの外面のはかなさとは対照的である。だが、25年間、デルフィンの子を育てあげた今になって、あの恋文はアリーダが書いた、と知らされたグレースの落胆は、いかほどであったろう。アリーダも、25年間、自分の夫の手紙を心の拠り所にして生きてきたグレースへの嫉妬心を克服することができない。すでに死んでいるとはいえ、二人の女性の人生をこれほど狂わせたのは、デルフィンの責任ではないのか。そもそもデルフィンがグレースと性的関係までもったのは、なぜなのだろうか。その直後、アリーダと結婚するのに、躊躇はなかったのか。ホーラスは、バーバラが自分の子ではないとの自覚をもっていなかったのだろうか。もっていたとしたら、アンズリー夫妻の関係とは、ど

のようなものだったのか。

アリーダの最大の誤算は、「最も慎重な女性が、必ずしもいつも慎重とはかぎらない。」(19) と思いいたらなかったことだろう。アリーダが書いた手紙に、「慎重な」はずのグレースが返事を出し、夜の円形球技場で彼女がデルフィンと結ばれたことを知ったアリーダの、グレースに対する嫉妬は再燃する。もし、この嫉妬心を克服できるものがあるとするれば、結果としてデルフィンの「妻」となったのは、自分であり、グレースが得たものは、自分が偽造した一通の手紙にすぎない、との自負心である。だが、最後の振り子は、グレース側に揺れる。作品の展開に、逆転に次ぐ逆転を用意するのも、ウォートンの多用する手法である。その一夜でバーバラを授かったとの、勝利にみちた告白をアリーダにして、グレースは階段を上っていく。作品最後で描写される、残されたアリーダとの心理的立場の逆転は、みごとで、あっけなく、ローマの街に鳴り響く鐘の余韻のように、読後いつまでも読者の心を震わせるのである。

おわりに

ウォートンが『ローマ熱』で描いたのは、ヴィクトリア朝初期から1920年代までの約一世紀間、「結婚」して「妻」となるしか生きる選択肢がなかった時代に、個々の女性がその運命をどのように受けとめ、どのように生きたかである。ヤーロムも総括しているように、女性にとって「結婚」とは、なによりまず、経済的現実に対応するための手段であった。『ローマ熱』でも、アリーダが、デルフィンとの愛情生活ではなく、経済的要因に基づく外的な生活についてのみ言及している点で、これを実証していよう。グレースに関しても、周囲を驚かすほど急な、ホーラスとの「結婚」までの顛末についてこそ述べられるものの、その結婚生活については、まったく言及されない。「ローマ熱」が、グレースの未婚での妊娠というスキャンダルを隠蔽するために使われ、快気二ヶ月でホーラスとの結婚が挙行された。予定より早い出産を、新婦がどのように説明し、新郎がどのように受けとめたのかについても、説明はない。アリー

ダやグレースの祖母の世代、母親の世代、ジェニーとバーバラの世代についても、「結婚」に至るエピソードだけが語られるのは、女性にとって「結婚」に至るプロセスと、「結婚」にたどりついた事実は重大であっても、「結婚」以降、つまり「妻」としての生活には、語るべきものがないとウォートンが考えていたからである。いや、むしろアリーダとグレースが演じた、「結婚」前の情熱的な愛憎劇を思うとき、女性にとって「結婚」生活＝「妻」であることは、豊かな感性を殺し、自我を捨てて耐える試練とすら考えていたのではないだろうか。

ただ、その長く、無味乾燥な「結婚」生活を余儀なくされる前に、女性には、自分の意志を主体的に貫く手段として、「母親」となる道があった。あるいは、「母親」とはなくても、「妻」となることを選択しない道すら可能ではあった。グレースは、愛した男性と自分をつなぐ存在の「母親」役に徹することで、25年間の、恐らく本意ではない「妻」役を演じることができたのだ。バーバラがデルフィンとの子であって、夫ホーラスとの間には子どもがいない設定も、形式的な夫婦関係を示唆する小道具かもしれない。当時はおろか、つい最近までアメリカ社会が墨守してきた倫理に反して、ウォートンが女性に切札として認めたのは、「結婚」制度の根幹を揺るがしかねない選択であった。社会が定めた「結婚」制度は、女性にとって必ずしも真の幸福や喜びをもたらすものではない、と信じていたからであろう。だからこそ、タブーを犯して、婚外子を宿すことが、その後の長い「結婚」生活に耐えうる精神力を与えるほど、情熱的で、豊かな体験として肯定されるのだ。また、グレースの場合、逢瀬のきっかけも、実際にはデルフィンからの誘いではなかったわけで、彼がどのような思いで、結婚も想定していないグレースと、性的関係を結んだのかは定かでない。したがってこの関係は、当時、もっとも「家庭の天使」像に近かったグレースが自主的に決意した、女性として究極の選択だったのだ。子どもの真の父親を知りうるのは、その子を産んだ母親でしかないのだから。

『ローマ熱』でもう一つ注目すべきは、グレースとアリーダの長年にわたるライバル関係であろう。「家庭の天使」となるべく教育を受けてきた二人では

あるが、25年を経た今、積年の嫉妬や憎悪を驚くほど率直に表現する。二人の率直な感情の激突が、作品に緊張感を与え、生身の人間らしい親近感を漂わせつつ、話が急展開していく。作品の初めから、最後の一行にたどりつくまで、常に優位に立つのはアリーダだ。アリーダの率直さが、デルフィン「妻」の座を獲得した自負心に支えられているのはまちがいない。だが、結婚前からグレースに抱いてきた羨望や嫉妬や嫌悪といった負の感情は、「妻」の座が解消してくれるどころか、増長していったのは確かである。その要因の一つとして、一見グレースを思わせる「家庭の天使」のように育つジェニーが挙げられる。アリーダが夫似の幼い一人息子を亡くしたエピソードも挿入されているので、「母親」の座は、彼女に挫折感と喪失感だけを与えたことになる。バーバラへの羨望も、イタリア人侯爵との経済的に恵まれた彼女の「結婚」が、「母親」グレースの「孫に囲まれた完璧に穏やかな老後」(傍点筆者。17)を約束する点に集約される。「妻」となり「母親」となる生き方こそ、女性として世代を越え継承すべきもの、との固定観念的呪縛から解放されないかぎり、女性の苦悩は尽きないことを、彼女自身まだ自覚していない。25年ぶりにグレースと対峙し、バーバラがデルフィンとの子であったことを知ったアリーダが、グレースに大敗を喫したと感じたのも、まさにこの故である。作品は、「妻」としての自己存在感を喪失し、「母親」としての意義も見失い、自己否定感に襲われたアリーダを残して幕を閉じる。

一方、ウォートンはグレースを、二人のライバルのうち、勝者として描いた。婚外子を産んだ女性の葛藤という点では、『二人の母—1850年代』と共通するものの、シャーロットが、「母親」であるために「妻」となることを放棄せざるをえず、しかも後に、その「母親」の座すらライバルに奪われ、屈折した叔母役に甘んじなければならなかった、という設定とは対照的な展開が選ばれている。作品初めこそ、グレースは「家庭の天使」的人物を想定させるが、女性にのみ与えられた力を利用して、自分で望んだ妊娠をし、「母親」となり、しかも、「妻」としての経済的安定・社会的地位・世間体をも手にしたのだ。親友の恋人を愛したこと、危険とされる夜の逢瀬に出かけたこと、婚外子を産ん

だこと、これら作品で示唆されるグレースの行為はすべて、当時の社会が求める「家庭の天使」像に背く行為だった。一見完璧な「家庭の天使」を装っていたからこそ、この背信行為が可能であったとも言える。そしてその反社会的行為にもかかわらず、いや、むしろ、自分の感性に正直であり、自分の意志に従って行動したからこそ、バーバラに恵まれた。そして、このバーバラの存在が、形式的な「妻」としての生活に耐えることを可能にした。自身が人生を総括する段階にきて、ウォートンは、社会が女性に課した道徳に反して、力強く、そして巧みに生きることを、むしろ奨励する思いで、グレースの生き方に軍配をあげたのだ。

註

- 1) 『ローマ熱』をウォートンの最高傑作の一つと考えたのは、たとえば Wolff, Cynthia Griffin. *A Feast of Words: The Triumph of Edith Wharton* (New York: Oxford University Press, 1977), p. 396やLyde, Marilyn Jones. *Edith Wharton: Convention and Morality in the Work of a Novelist* (Norman: University of Oklahoma Press, 1959), p. 174など。
- 2) 拙論『二人の母—1850年代』—母親の座をめぐる対立—（京都光華女子大学研究紀要 第41号）参照。
- 3) Wharton, Edith. *Roman Fever and Other Stories* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964) p.15 なお、*Roman Fever*からの引用については、本文中に頁のみを記す。
- 4) Hartog, Hendrik. *Man and Wife in America: A History* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2002) p.95
- 5) Yalom, Marilyn. *A History of the Wife* (New York: HarperCollins Publishers, 2002) p.190では、1839年になってミシシッピ州で初めて妻に財産権が付与されて以来、全米各州における既婚女性の法的地位が徐々に向上し始めた、とある。1869年から1887年の間に、33州とワシントンDCが、妻に自分の収入を管理する権利を付与したし、夫婦が全財産を平等に

所有する法律を採択した州もあるなど、大多数の州で新しい法制度が妻に有利な進展を遂げたものの、「庇護」されるかわりに「従順」であることを女性に求める考え方は、法解釈にも長く影響を及ぼした、という。(参照Hartog, *Ibid.*, pp.287-295)

6) Hartog, *Ibid.*, p.93

7) *Ibid.*, p.96

8) Petry, Alice Hall. "A Twist of Crimson Silk: Edith Wharton's 'Roman Fever.'" *Studies in Short Fiction* 24.2 (1987) pp.163-166では、作品の展開と、グレースの編物の進み具合との関係を詳細に追っている。

引用文献

Hoeller, Hildegard. *Edith Wharton's Dialogue with Realism and Sentimental Fiction*. Gainesville, FL: University Press of Florida, 2000

Mortimer, Armine Kotin. "Romantic Fever: The Second Story as Illegitimate Daughter in Wharton's 'Roman Fever.'" *Narrative* 6.2 (1998) pp.188-198

Sweeney, Susan Elizabeth. "Edith Wharton's Case of *Roman Fever*." In *Wretched Exotic: Essays on Edith Wharton in Europe*. Ed. Joslin, Katherine and Alan Price. New York: Peter Lang, 1993:pp.313-331

Yalom, Marilyn. *A History of the Wife*. New York: HarperCollins Publishers, 2002